

は、毒物・農薬の割合が男性で比較的多く、薬物服用の割合は女性に有意に多かった ($p < 0.01$)。また、高齢世代ほど薬物服用の割合が比較的低く、毒物・農薬の割合が高かった ($p < 0.01$)。自殺企図の動機を62.3%に認め、そのうち急性の動機が57.8%、対人関係の問題が59.8%を占めた。また、高齢世代ほど慢性の動機の割合が高かった ($p < 0.01$)。精神疾患を47.2%に認めた。入院中に当院精神科医の診察を受けたのは未遂者の37.8%、退院後に精神科治療を受けたのは39.0%に過ぎなかった。今後、精神科医を含めた医療従事者が自殺問題に積極的に取り組み、自殺予防システムを確立する必要がある。

II. 特別講演

精神科領域における救急医療

松浜病院精神科

内藤明彦先生

最近、精神科救急が精神医療の重点項目として取り上げられるようになった。精神科救急システムの確立は、精神障害者の社会復帰 (normalization) の促進と表裏一体をなしている。すなわち、病院から社会復帰した患者の病状が急激に悪化したり、再発した場合それに対応しうる救急システムがない限り、normalization の促進は逆に社会的混乱を招くことになる。

このような精神医療の流れの変化もあり、ようやく全国の各都道府県が精神科救急に取り組み始めた。

精神科救急は他診療科の救急医療とはかなり異なる側面を持っている。たとえば入院が必要な患者の場合、その入院形式は①措置入院 (公権力による強制入院) ②医療保護入院 (保護者の同意による強制入院) ③任意入院 (患者本人の同意による入院) のいずれかである。入院に当たっては患者の病状の程度、他人に危害を加える可能性の有無、患者の同意能力の有無や程度などを考慮して決定するので精神科救急の実際場面では正確な法律的判断が求められる。精神科救急を行うには「精神保健指定医」の資格を持つ精神科医を確保しておかなければならない。精神保健法では「精神障害者は精神科病室に入院させなければならない」と規定しているので、精神科病室を確保しておかなければ精神科救急は成り立たない。

既に精神科救急を実施している都道府県の救急システムを調べてみると、措置入院の救急システムとそれ以外

のソフトな患者の救急システムとを分け、いわば2本立て方式の救急システムを採用している自治体が多い。精神保健指定医と精神科病室の確保が精神科救急の基本である。

新潟県の救急システムをスタートさせ、これを整備するには1) 地域ブロック割をどうするか、2) 基幹病院制を採用するか、輪番病院制を採用するか、3) 精神科を持つ病院の機能分担をどうするか、など早急に協議し具体的な計画作りを行う必要がある。精神科救急について救急医学会からも側面的な援助をしていただきたい。

第33回新潟化学療法研究会

日時 平成6年7月2日 (土)
午後3時30分～6時00分
場所 ホテルイタリア軒

I. 一般演題 I

1) ペニシリン中等度耐性肺炎球菌

金子 陽子・吉田真理子 (厚生連中央総合)
加茂 綾子・田中 恵子 (病院検査科)

薬剤感受性検査においても微量液体希釈法が普及しドライパネルも多く使用されており、今回 S. pneumoniae の菌液調整基準濁度法においてドライパネルの有能性について検討した。1993年4月からの1年間における S. pneumoniae 368株の内、高度耐性株は6%、中等度耐性株は14%、全体としての耐性 S. pneumoniae は20%だった。MIC90で、PCGが0.5 $\mu\text{g/ml}$ 、ABPC 2 $\mu\text{g/ml}$ であり、CLDM、EMの耐性はそれぞれ25%、41%であり、薬剤感受性は他報告と同じであった。又耐性 S. pneumoniae をディスクで検出するには K-B ディスクの MIPIC が推奨されているが、阻止円直径 19mm 以下の時は感受性株が多くあるので注意を要すると考える。

2) 当院における最近6年間の黄色ブドウ球菌薬剤感受性の推移

松田 正史・鈴木 康稔 (水原郷病院内科)
関根 理 (同 検査科)
樋口 興三 (同 検査科)

当院で分離した最近6年間の黄色ブドウ球菌薬剤感受性

性の推移を検討した。1989, 91, 93, 94年を調査年度とした。黄色ブドウ球菌平均検出数は59, 平均検出率は9.1%であった。ディスク法では MRSA は91年に減少しその後増加した。DMPPC 高度耐性菌は入院株で45.3から74.1%へ外来株で1.0から24.4%へ増加した。MICでは入院株で MRSA は91年に減少したが93年に増加し, 94年には50%で, 外来株では経年的に増加した。CEZ耐性菌は MRSA とほぼ同様の推移を示した。MINO 耐性菌は, 91年から20%以下に減少した。IPM 耐性菌は入院株で91年に消失したが93年に再増加し, 93年からは外来株にも出現し94年には30%と近年増加傾向にあった。今後この集計を診療科, 検体種, 病棟, 患者背景などで分類し再検討する予定である。

3) オウム病が疑われた器質性肺炎の1例

勝井 郁・松田 正史
鈴木 康稔・関根 理 (水原郷病院内科)

63歳, 男性。職業は養鶏業。インコ, 九官鳥も飼育。主訴は乾性咳嗽, 全身倦怠感。胸部レ線で両側に一部斑状陰影を伴うスリガラス様陰影を認め, HRCT で抹消に強い両側びまん性の肺野濃度上昇と小葉中心性陰影を認めた。ミノサイクリン 200 mg/日の内服で胸部陰影は改善せず。C. psittaci 抗体価は陰性で, 末梢血好酸球増多を認めたため, BAL, TBLB を施行。BAL 液はリンパ球71%, マクロファージ16%, 好中球10%, 好酸球1%で, OKT 4/8比は0.17と低値を示した。TBLBでは急性間質性肺炎を伴う器質性肺炎との病理診断を得た。プレドニゾンで胸部陰影は消失した。病理所見, 臨床経過から過敏性肺臓炎, 中でも鳥飼病が最も疑われ, 環境誘発試験, 沈降抗体法などの血清学的検査で診断を確定する予定である。

4) 高齢者における眼感染症の検出菌

宮尾 益也・本山まり子
阿部 達也・笹川 智幸 (新潟大学眼科)
大石 正夫 (信楽園病院眼科)

【目的】近年, 高齢者人口は増加し, 眼科領域においても老人患者の急増を認める。今回, 眼感染患者の検出菌を年齢別に検討した。

【方法】1987年~1993年に当科で眼感染症患者より検出された菌を対象とし, 疾患別および年齢別に検出頻度を検討した。

【結果】1) 736名中50歳以上が, 46.5%を占めた。2) 1,764株が検出され, グラム陽性球菌 (GPC) 46.0%, 嫌気性菌 21.1%, グラム陽性桿菌 (GPR) 17.2%, グラム陰性桿菌 (GNR) 9.8%であった。GPC 811株中, CNS 52.2%, S. aureus 21.1%, α -streptococcus 17.5%であった。GPR 304株中40.1%が Corynebacterium であった。GNR 172株中非発酵菌 55.8%, H. influenzae 19.2%であった。3) 眼瞼炎, 慢性涙嚢炎, 角膜感染症, 術後感染は高齢者に多く認めた。4) S. pneumoniae, Haemophilus は10才以下に多く, CNS, S. aureus 非発酵菌は各世代で検出された。5) 50歳以上では S. aureus の43.1%が MRSA であった。

一 般 演 題 II

5) Sparfloxacin の肺抗酸菌症治療への応用の可能性

吉川 博子・青木 信樹
薄田 芳丸 (信楽園病院内科)

【目的】Sparfloxacin (SPFX) は抗酸菌に対して強力な抗菌活性を有している。抗酸菌症治療への応用の可能性を検討した。

【方法】#1 肺結核及び肺非定型抗酸菌症の症例に SPFX を処方した。#2 SPFX の喀痰中濃度のピーク値を抗酸菌に対する MIC80 で割った値について検討した。#3 抗酸菌症の患者に SPFX 200 mg を隔日投与し, 本剤の血中濃度を経時的に測定した。

【結果】#1 炎症反応は改善し, 菌は陰性化した。#2 SPFX の喀痰中濃度のピーク値は M. avium complex, M. tuberculosis の MIC80 に対して, それぞれ5.4, 168と良好な値を示した。#3 腎機能正常者で SPFX 隔日投与にて, 十分な血中濃度を示し, かつ蓄積も認められなかった。

【考察】SPFX は肺抗酸菌症の治療に有用であると思われたが, 比較的高齢者に多い疾患であり, より安全に長期間使用するためには低用量での使用が検討されるべきであると思われた。

6) 急性虫垂炎症例に対する化学療法の検討

川口 英弘・石川 裕之 (巻町国民健康保険
病院外科)

過去約7年間に当科で経験した急性虫垂炎症例190例を対象に, 投与された抗生物質の有効性を入院期間, 入